

朱印呈

客臘東京

朝日紙上

於てか 貴誌

を 特誌 大に

有 同感 にも

一 書 口を 裁せん

なせし 生憎に

有 住 必と 知り

吉野博士の御

宛へ 氣附 いて 差

上げんと 叙せし



宛へ氣附にて差

上げんと致せし

是れ亦存せず

あづかに昨年十一月

赤の二十七日會

席上にて 小生

「赤松君の國家

社會主義には

賛成したる旨申

述べたや 馬場

恒吾君は久對

ありしも 高橋

ありしも 高橋

亀吉君は同感

りしき口吻は有

之いひしし 勿論

一場の漫談にて

悪邪氣ホる 詰

朽^ニ過^シぎ^テりしも

生の念頭には

絶えずその事

往來以し居り

且つ 中野正剛

氏の所説と

氏の所説と

尊六の御説とが

坐の胸底に常に

結ば付らば考へ

られ居り候

國家人民人の

幸福の爲に折用

御健闘を祈り

申候 勿ニ
不宣

一月十九日

近松秋江

近松秋江

赤松克磨様
侍人

赤松克磨様
侍人

820/10
407/0
413/1
802
4131
400
131

二方面通行の際自
持参内
此

一月十九日

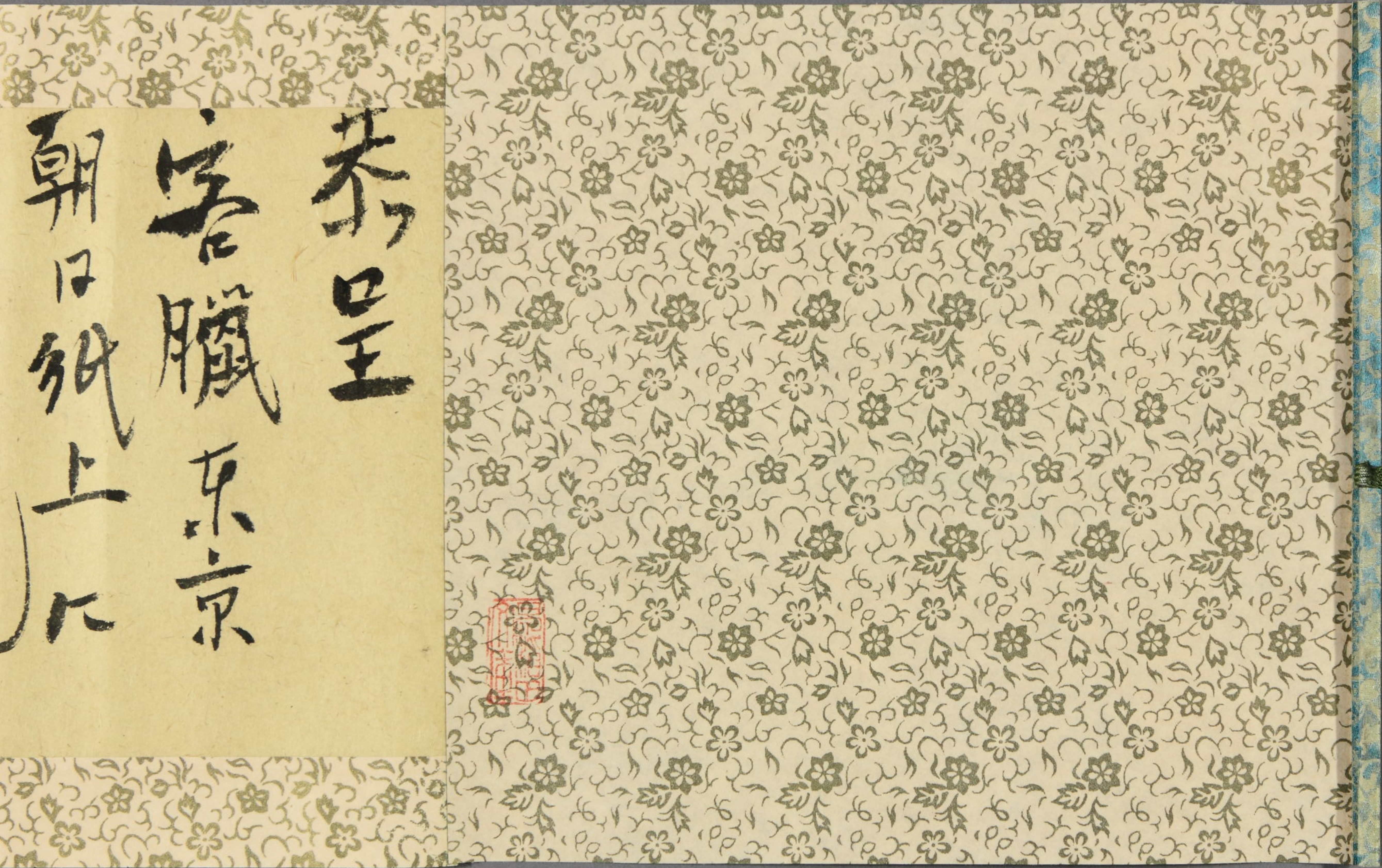
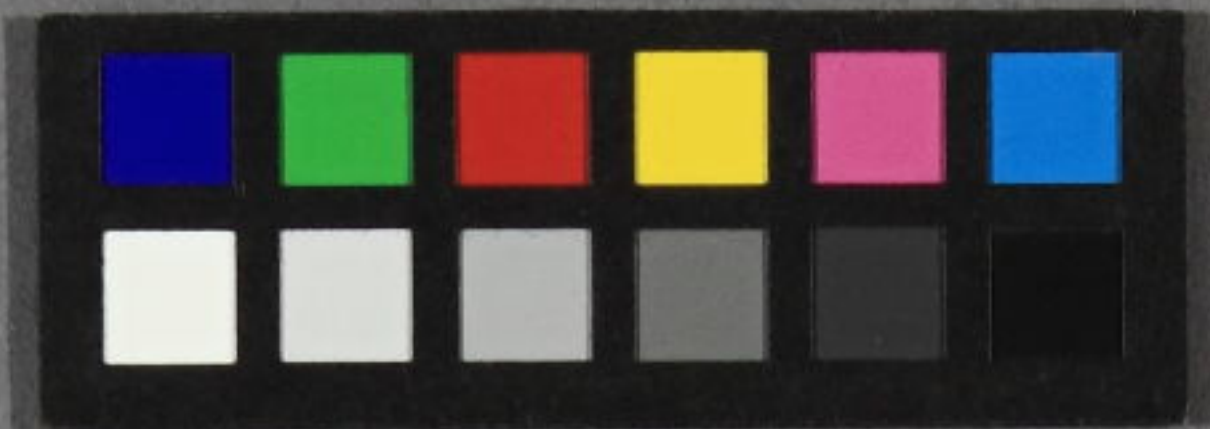




近松長生

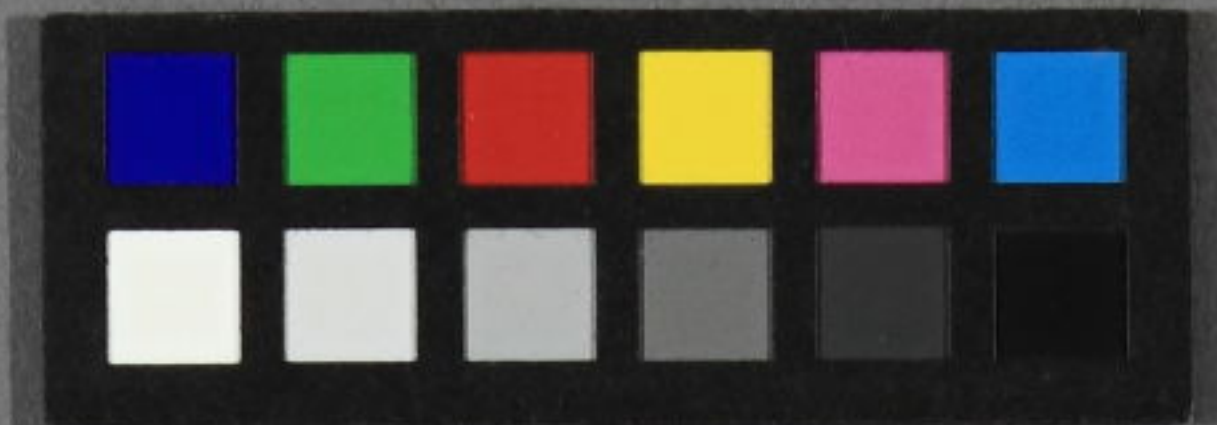
特別
又6
9348





朝日紙上
 客臘東京
 未呈





近世文藝叢書

特別
又6
9348





近松秋平
三浦



三十一日 寄 友 人 札